最強の転生者って俺……？

近衛龍一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
最強の転生者って俺……？

【Ｎコード】
Ｎ１４０４Ｙ

【作者名】
近衛龍一

【あらすじ】
大型トラックに引かれたと思ったら何故か目の前には広々とした草原が……？最強魔導師として転生した五月雨浩平が慣れない異世界で魔法ギルド仲間達と共に成長していく……？

プロローグ

「あぁ……今日も疲れた……」

俺の名前は五月雨浩平（さみだれこうへい）。
成績は中の下、ルックスも中の下で、運動神経もいたって普通のモテない高校生二年生である。

ファッションといえば、伊達メガネだけで、特に気をつかっている訳でもなく、部活にも入っていない。
そのせいもあってか彼女なし。

青春？　何それ食えんの？

そしてそんな俺は、今日も元気に学校へ。
いつもと同じく影のような存在で一日を終え、趣味のライトノベルを学校近くの本屋で買って帰宅中。
信号待ちで携帯を見るとメールが三件入っていたが、どれもオタク友達からだったので無視。
携帯を閉じ、そろそろ信号が変わる頃だと前方を見たが、未だに赤信号だった。

ちっ……まだ変わんないのかよ……

「あ、危ない！！」

イライラする気持ちを抑えていると、突如信号待ちの人だまりの中から声が上がった。

パッとみると赤信号の最中、５歳くらいの男の子が、他の人と話してるお母さんから離れて車道に飛び出していた。

すぐ近くには大型トラックがクラクションを鳴らして迫っている。

く……っ！　誰も行かねえのかよっ！

『あー！！』と声をあげるだけの大人を見兼ねた俺は、鞄と本を放り投げダッシュでその男の子を助けに行く。

男の子を掴んだときにはトラックは残り５メートルほど。

ま、間に合わねえ！！

そう感じた俺は、その男の子だけを歩道に投げる。

俺自身は間に合わないか……

何か俺の地味な人生には派手な死に方だな……

坊主、俺の分までしっかり生きてくれよ……

ライトノベルを読むことが出来なかったことだけを後悔しながら、死を覚悟する。

そしてそのまま、俺はトラックのカーライトの光に包まれながら目を閉じた。

目を開けてみると……？（前書き）

新連載です！
よろしくお願いします！

目を開けてみると……？

「あ、あれ……？」

来るべき衝撃に身を構えていたのだが、一向にその衝撃が来ない為、俺はゆっくりと目を開けた。

「こ、ここは……？」

目の前に広がったのはアスファルトの道路ではなく、広い広い草原だった。

しかも、夜ではなく太陽が出ているためやけに眩しく感じ目を細める。

お、俺って確かトラックに引かれかけてたんじゃ……？

自分の思っていた状況と、目の前に広がる景色があまりにも違うため、とりあえず頭の中を整理することに。

・学校帰りに『バカ〇ス』の小説を買って帰っていた。

←

信号待ちで携帯を確認。

←

通行人Ａのあげた声で５歳ほどの子どもが道路に出ていたことに気づく。

←

誰も助けに行かなかったので俺が助けに行った。

←

行ったのはいいが、大型トラックがすぐそこまで来ていた為もう間

に合わないということが分かる。
←
とりあえずその子どもだけでもと思い投げる。その時点で俺は助からなくなる。
←
死を覚悟し、目を閉じる。
←
目を開けると壮大な草原が。

……やっぱおかしくね！？
何でいきなり草原なんだ！？
落ち着け、落ち着くんだ俺…。
そんなわけないだろ？
きっと死ぬ間際の幻覚なんだよ。
頬を抓ればこんな幻覚もなくなるはず…っ！

と、思ってギュゥゥっと頬を抓る。が、

「……ひゃっぱり変りゃん……」

いや、分かってたよ……？
あのタイミングでこんな長い幻覚なんて見るわけないからね…？
うう〜〜っ、とない脳をフルに回転させて考えを絞り出す。

「……もしかするとここは天国の地獄の狭間……？」

確かいい行いをしながら死ぬとと神様が出てきて云々とか、『本当はお前は死ななくてよかったんだがこちらの手違いで』とかいう展開があったような……
ありえない話ではあるがもしかするともしかして……

自分でも信じ難いがそういう考えが出てくるところがオタクぽいよな。

まあそれはともかく、さっきの考えからするとこの辺で神様が登場するはず……

「お～い！　神様！　この辺にいるんじゃないのか？　いるなら返事してくれ！」

『ガルルルゥゥ！！』

俺の呼びかけに応えてくれたのは残念なことに神様の声ではなく狼らしき動物の唸り声。

はぁ……やっぱ狼くらいしか返事を……って狼！？

バッと振り返ると一匹の目つきの悪い狼がヨダレを垂らしながら値踏みするかのようにこちらを睨みつけていた。

……もしかしてこれ、死亡フラグ？

「ガルゥーー！！」

雄叫びと共に飛びかかってくる狼。

それとほぼ同時に走り出す俺。

もうここが何処かなんてどうでもいい。

とにかく今は……

「ついさっき死ぬ思いしたのにまた死ぬなんて嫌だぁぁーーー！！」

意味の分からんところでくたばるなんてゴメンだ！

まだちっちゃい子を助けてくたばった方が華があるのにっ！

神様、あなたはそこまでして俺を惨めにしたいんですか！？

「うおぉぉーー！！」

火事場の馬鹿力。

今それを猛烈に体感しながら、全力で走る。

しかしお約束というものがあって、こういうときにこそ転ける。

コツン！

「おわっと！？」

そのお約束通りに転けた俺。

ほんと、惨めだぜ……

後ろにはゆっくりと近づいてくる狼。

逃げ場はない。万事休すか……

と、思ったそのときーー

「火炎弾（フレイム）！！」

どこからともなく、火炎弾が飛んでき、狼にクリーンヒット！

「グルゥーー！？」

狼は突然の攻撃を避けれず、痛そうな声を出して逃げ去る。

た、助かった……

「す、すみません、ありがとうございました」

本当に助かった。

きっと今の助けがなければ俺は死んでいたはずだ……

「いや、気にすんな。当たり前のことをしただけだ」

助けてくれた人の方をみると、俺と同い年くらいの青年が、見慣れない服で立っていた。

おおっ、人だ！

助けてくれたのだから当たり前だが何となく新鮮な感じがする。

「それより、お前はこんなところで何をしてんだよ？魔法は使えないのか？危ないぞ？」

「ま、魔法……？」

魔法って…あれだよな？

有名な某巨大魔法学校に通うメガネの少年が杖を振って使うあれだよな？

「何だよその初めて聞きましたみたいな顔は？」

そういって、その青年はボウッと手に炎を出す。

……ヤベ……何がなんだかもっと分からなくなってきたよ……

現状理解……できるのか？

「お、お前本当に魔法を初めて見たのか……？」
「え…？　ま、まあ魔法というものは知ってるけど見るのは初めてっていうか…」
「今どき珍しい奴だな……名前は？」
「な、名前？　五月雨浩平って名前だけど」
「サミダレコウヘイ？　聞いたことない名前だな。どこから来たんだ？」
「来たというよりかいつの間にか居たんだが……元は江戸川区に住んでた」
「エドガワク？　知らねえな……」
「そ、そうだよな。日本ってところの地名だ」
「ニホン？　聞いたこともねえや。クトファニア大陸辺りの小さな国か？」

な、なんだその大陸は……？
そんなところあったっけ？

「ク、クトファニア？　違う違う。ユーラシア大陸だ」
「さっきからエドガワクだのニホンだのユーラシアだの言ってるが、全然聞いたこともねえぞ？」
「えっと……じゃあここは？」
「ここ？ここはセルノスに決まってるだろ」
「セルノス……」

やっぱり聞いたことがない……
この人は日本を知らないようだし……
一体どうなっているんだ？

「お前の名前はなんていうんだ？」
「俺か？　俺はリクト・フェリネウスだ」
その時俺は『あれ？』と思った。
『リクト・フェリネウス』。
リクトはともかく、フェリネウスは漢字じゃまず表せないだろう。
日本人とのハーフという可能性もあるが、先ほどの会話と合わせて、ここは日本じゃない。
それどころか、ここが俺の知っている世界なのかすら怪しい。

転生

小説などである設定だが、俺の頭の中でその薄っすらとしていた予想がだいぶ形づいてきた。
だが、その裏づけが証明されていくにつれて現れた疑問。
なぜ俺とこの人は会話をしているんだろうか？
ここが日本でないとすれば今話しているのが日本語でないことになる。
だが俺は日本語と英語が少し話せるだけだし……

「な、なあ…ええっと……」
「リクトでいいよ」
「サンキュ。じゃあリクト、今お前って地図は持ってるか？」
「地図？　ああ、持ってるぞ」
後ろに背負っていたカバンらしきものから一枚の紙を取り出してくれた。
それを受け取って広げると、俺は驚いた。

「こ、これは……！」

地図が全く一緒なのだ。俺がよく学校見たりするような日本の地形とほぼ一緒。
話が分からなくなってきた……っ！

「ち、ちなみに聞いておくが、今の俺達って大体どの辺りにいるんだ？」
「今は……ここだな」

そう言ってリクトが指した場所。
それは紛れもなく、俺が住んでいた東京、しかも江戸川区近辺だった。

「重ね重ね悪いが、世界地図……というか、他の大陸まで載った地図、あるか？」
「ああ、勿論あるぞ」

ある一つの仮定を思いついた俺は、リクトから受け取ったもう一つの地図を広げた。
やっぱりな……

もう一つの地図にはやはり日常でよくみる世界地図がそこにはあった。
ということはここは俺の元居た世界じゃなく、その元居た世界に似た世界ってことだ。

うん、確定。俺はきっと何かの拍子……とはいっても、それはきっとあの事故が原因だな。

まあそれの所為で異世界に転生、トリップしちまったってわけか。
きっと言葉が通じるのは俺の方が別の言葉を話しているんだろう。
一度、何かの本で転生（ライトノベル）すれば転生先の言葉が自然と分かるって言ってたし。

……って結論だしちゃったけどそれってヤバくね！？
元の世界に帰る方法知らないからわかんねえじゃん！！

「どうしたんだよコウヘイ。まるで異世界に飛ばされたやつが帰る方法分からないから戸惑ってますみたいな顔してよ」

いや、その通りですよ！？
戸惑いますけど！？

「な、なあコウヘイ？　その絶望みたいな顔やめろよ。家はどこだ？　魔法使えないんじゃ話にならんから俺が送ってやるよ。危険だしな」
「その家なんだが……俺にはない……」
「い、家がない？」
「あ、ああ……」

正しくはこの世界にはない、だが。
まあそれも俺の仮説が正しければの話だがな。

「そうか……」

リクトも考えこむようにして顎に手を添える。
そしてゆっくりと口を開いて、俺にこう告げたのだった。

「ならさ、とりあえず俺のところの魔導師ギルドに来ないか？」

うん、なんだか凄い展開になってきたぞ……？

自由の龍

俺はギルドに連れていってやると言ったリクトについて行った。
広い草原から一変、市場のような街に入っていった俺達。
石造りの町並みは海外映画にも出てきそうだ。
ふと俺はリクトを見る。
身長は１７５センチくらい。まあ俺と同じくらいだな。
だが俺とは違い、小顔で整ったその顔立ちは羨ましく、妬ましい。
異世界（？）とはいっても同じ人間なのにどうしてこうも違うんだ……？
そして真っ赤に燃えるような赤髪は、先ほどリクトが使っていた火の魔法を連想させる。

「な、なあリクト。魔導師ギルドってどんな風なんだ？」
「コウヘイは魔導師ギルドまで知らねえのか？魔導師ギルドは、魔法を使って仕事するやつらが集まる場所なんだ。ギルドに依頼の仕事が入るから、魔導師は仕事を求めてギルドに入るんだ」
「説明ありがと。だが俺は魔法を使えないんだぜ？なのにギルドに行ってどうするんだ？」
「ウチのギルドは仕事場ってだけじゃないんだよ。困ってるやつは助ける。というより、そういうやつらが集まってるギルドなんだ」
「そういうやつら？」
「ああ。小さい頃に色々あって親を失くしたやつらが、ギルドにきて働く。魔力を持ってないやつらも、ギルドの雑用とかして働いてるんだ」
「へぇ～。というか、ウチのギルドってことは他にもギルドってあるんだな」
「当たり前だ。世界中に何百ものギルドが存在してる」

それだけ魔法が広まってるってわけか。
やっぱ元の世界と全然違うな……

「リクトたちのギルドって有名なのか？」
「ああ。俺たちは世界でもトップレベルのギルドだ」
「トップレベルのギルドって入るのが難しいだろ？」
「俺たちのところは関係ねえ。さっきも言ったろ？困ったやつは助ける。これがギルドの決まりだからな」
「そっか。いいギルドだな」
「ありがとよ」

ギルドかぁ……
昔何度かパソコンのオンラインゲームなんかで見たことはあるが、この世界にはそれが普通なんだな。

「それよかコウヘイ、お前の着てる服って何だ？あんまり見ない服だが……」
「これか？　学生服だよ。さすがに見たことあるだろ」
「学生服……？」
「ほ、ほら。学校に行くとき着ていく制服だよ」
「学校？　ああ、勉強をしに行くところな。でも学校に制服なんてないだろ」
「あー……俺のところはあったんだよ」

こっちには制服がないのか……

「へえ。ってことはコウヘイは学校に行ってたんだな」
「ま、まあ……。リクトは行ったことないのか？」
「行ったことねえ。物心ついたときからギルドに入って魔法の修行してたんだ」

「物心ついたときから？　両親は？」
「知らねえ。気づいたらギルドに入ってて、親の顔は……覚えてないんだ」
「そうなのか……わ、悪いな。そんなこと話させて……」
「いいんだよ。別に気にしてねえし。今は親のことよりも早く一人前になってギルドの仕事をしたいと思ってるんだ」
「え？　リクトってまだ仕事してないのか？」
「マスターが子供はまだダメだって言ってやらせてくれねえんだよ。今だってちょっとマスターに頼まれて出て行って、その帰りにコウヘイを見かけたんだ」

意外だな……
さっきの魔法だって狼を一発で追い返したんだし十分強いと思ったんだけど……
まあそう簡単じゃないってことなのか？

「そろそろ仕事も出来るようになるはずなんだが……っと。着いたぞリクト」
「ふぇ？」
「ここが俺が所属してるギルド、『自由の龍（リバティドラゴン）』だ」
「自由の龍…リバティドラゴン……」
「そうだ。由来はギルド皆でセルノスの住人が規則に縛られない自由な生活を送れるようにこの街を守る役目。それを龍に例えたんだ」

それで『自由の龍』か……
住人の自由を守る龍……いいじゃねえかよ、その由来……
それにしてもデカイな……
どこぞやの城のみたいだ……

「ほらコウヘイ、入れよ」

「お、おう」

俺はリクトに続いて、そのデカイ建物に入っていった。

「ただいま！　マスター！　今帰ったぞ！」
「おおリクト。帰ってきたか」
「あ！　リクト！　お帰り！」

リクトが一人のおじいさんみたいな人に挨拶すると、そのおじいさんと近くにいた女の子が返事をした。
あの人がマスターなのか。

建物の内装は、広々とした小洒落ていた。
そこでは大勢の大人が飲んだり、掲示板に貼ってある紙を見ていたりした。
おいおい……昼間から酒かよ……

そんな中、リクトがマスターと呼ぶ男に近づいていく。
俺も慌ててついて行くと、周りで飲んでいた人たちもリクトに『おかえり』と声をかけたりしている。
結構仲がよさそうだな。

「ただいまマスター」
「おおリクト。頼みごとは大丈夫か？」
「もちろん。ちゃんと婆さんに届けてきた」
「それは助かった。して、その後ろの少年は誰じゃ？」
「帰りに狼に襲われているところを助けたんだ」
「ど、どうも。五月雨浩平といいます」
「ふむ……珍しい名前じゃな。どこから来たのじゃ？」
「ええっと……説明しづらいといいますか、なんと言いますか……」

「どういうことじゃ？」
「それがよ、コウヘイのやつ、ニホンだのエドガワクだの意味の分かんねえこと言うんだよ」
「ココの辺りの者ではないということか？」
「まあ、はい」
「んで、家もないって言うからギルドに連れてきたんだ」
「そういうことか。ワシはこのギルドのマスター、クロレス・ロディアじゃ。お主……コウヘイでよいな？　コウヘイは魔法は使えるのかの？」
「い、いえ……使えないです」
「……ちょっといいかの？」
「へ……？」

突然マスターであるクロレスさんが俺の額に手を当ててきた。
い、一体どうしたんだ！？

「ふむ……やはりな」
「な、何がやはりなんでしょうか……？」
「コウヘイ、お前は魔法を使えるぞい。お主は立派な魔導師じゃ」
「……はいぃーーーーーっ！？」

何……？
どういうこと……？
俺、どうなっちゃうの……？

零魔法

よし、落ち着け俺。
今俺はこの人になんて言われた？
『お前は立派な魔導師だ』
うん、そんなわけないよね？
だって転生だよ？
神様を通じてもないのに魔力なんて持ってるわけないじゃん？
「あ、あの…クロレスさん？僕が魔法を使えるというのはないと思うのですが……」
「そう思うのならば手を前に出すがよい」
「は、はぁ……」
とりあえず言われた通りに手を前に出す。
これで魔法が使えないって証明出来るのか？
「よいか？　これで『我、魔法を操る者なり。汝、我の使う魔法を示せ』と言うのじゃ。それで魔法陣が出てくれば魔法が使えるということ。ついでにコウヘイの使える魔法が分かるということじゃ」
「わ、分かりました」
手の汗を拭き取り、再び手を前にやる。
これで魔法が使えるかどうかが分かるんだな？
「『我、魔法を操る者なり。汝、我の使う魔法を示せ』！」

俺が言われたとおりにそう唱えると……

キュイン！

「な……っ！」

魔法陣が俺の手に現れ、広がる。

ってことは俺って魔法が使えるの！？

「ふむ……やはりな」

クロレスさんは頷いている。

ま、待て……魔法が使えるってことは俺はどんな魔法が使えるんだ？

俺は自分が使える魔法がどんなものかと、何が出てくるのかドキドキし、その魔法が現れた。

「え……？　何これ……？」

現れたのは透明な何か。

なぜ透明なのかが分かったのかというと、薄っすらと見える境界線があったから。

なんだかデカいシャボン玉のようで強そうではない。

しかも、それが波動弾とかであれば発射されるのであろうが、全くその気配もなく、俺の手に引っ付いたまま。

何なんだよこれ！？

使えねえ！？

悲しくなるような俺の魔法。

これじゃあ使えねえほうがマシじゃねえか……？

リクトも『あ〜あ』といった様子でこちらを可哀想なものを見る目で見ている。
だが、クロレスさんは違った。

「こ、これは……っ！？」

何故か知らんが目を見開いてとても驚いていた。

「あ、あの……クロレスさん……？　俺の魔法って一体なんなんですか……？」
「零魔法……」
「へ……？」
「ゼ、零魔法じゃ……まさかこれを使える者がいたとは……っ！」
「マ、マスター。零魔法ってなんだよ……？」
「伝説の魔法（レジェンドマジック）の一つじゃ……」
「レ、レジェンドマジック！？」

な、なんだなんだ？
クロレスさんだけじゃなくて、リクトまで驚きはじめたぞ……？
この使えなさそうな魔法がそんなに凄いのか……？

「い、いや。まだそうとは決まっとらん。リクト、少し離れてコウヘイに向かって魔法を放つのじゃ」
「お、おう！」
「何ですと！？」

いや、『おう』じゃねえよ！？
あんなもん食らったら死ぬぞ！？

そんな俺の訴えを露知らず、リクトは俺から離れて手を出す。
というか建物内で魔法を放ってもいいのか……？

「火炎弾（フレイム）！」

狼を追っ払ったのと同じ火炎弾が俺の方へ飛んでくる。
ヤベッ！　当たる！
そう思って瞬時に目を瞑った。
気分は丸で、トラックに引かれそうになったあの瞬間と一緒だ。

シュウゥゥ

そんな音と同時に目を開けると、向かいに立つリクトがこう呟いた。

「お、俺の魔法が吸い込まれた……？」
「ｗｈａｔ？」

おっと。
驚きすぎて英語が出てしまった。

どういうことだ？
魔法が吸い込まれただと……？

「やはり零魔法じゃ……ウィリム、アレックス！　ちょいと来てもらえるかの？」

何かを確信したようなクロレスさんが二人の名前を呼ぶと、その二人が返事をしてこちらへ来た。

「お主ら、今の様子を見ておったな？」

「は、はい。見ていました」
「もちろんです」
「ならば、次はお主らがこやつに向かって魔法を放つのじゃ。同時でよい」
「わ、分かりました」

ちょっと待って！？　どういうことすっか！？
今の二人ってどうみても大人だよね！？
リクトであの強さなのに大人の魔法なんてヤバくない！？

「安心するのじゃコウヘイ。お主の魔法は魔法を吸収する魔法じゃ」
「え？　そ、そうなんですか……？」

な、なら安全じゃん。
じゃあなんでクロレスさんはまた同じことをするんだ？

「烈風弾（トルネード）！」
「吹雪（スノーストーム）！」

二人の手の魔法陣から、発射させた竜巻と吹雪はそれぞれが重なって一つのものとなり、俺に向かって襲いかかってくる。
って、あれデカくね！？

明らかに俺が出しているシャボン玉のようなものよりも大きい魔法は勢いよく突っ込んでくる。

本当であれば目を瞑っているだろうが、何となく魔法が吸収されるところを見てみたくて目を開けたままにした。
すると、

シュウゥゥ

さっきのと同じ音を出しながら、その大きな魔法を吸い込んでいった俺の魔法。
まるでブラックホールに吸い込まれるかのように中心に吸い寄せられた。

や、ヤベえ……この魔法強くね？

「ま、また吸い込まれた……」
「まだじゃ。これからが本番じゃ。コウヘイよ、今度はお主が攻撃する番じゃ。ワシから離れてワシに向かって呪文を唱えるのじゃ。呪文は『反転（カウンター）』じゃ」
「は、はい。分かりました」

指示通りクロレスさんから離れて呪文を唱える。

「反転（カウンター）！」

ドオォォン！

そんな凄まじい号砲が鳴ったかと思うと、俺の魔法陣から物凄い大きさの魔法弾が出て、クロレスさんを襲った。

「だ、大丈夫ですか！？」
「うむ。大丈夫じゃ」

クロレスさんはいつ張ったのか、自分を包んでいた透明な壁みたいなものを消すと、何かを確信したように近づいてきた。

「やはりお主が使える魔法は『零魔法』、伝説の魔法（レジェンドマジック）じゃ」

何なんだよそのチートみたいなやつは……？

なんで俺がそんなものを使えるんだ……？

真の効果、ギルド入門

零魔法。
伝説の魔法の一種で、あまりの強さの為使える者がいなくなり、伝説の魔法とされている物。
相手の物理系以外の魔法を吸収することができ、また吸収した魔法を二倍の威力で相手に返すことができる。
更に複数の魔法を吸収すれば、それを混合した魔法も放つことが可能。
これが現在分かっている、俺の魔法なんだが……

「で、それを何で俺が使えるんでしょうか……？」
「それはワシにも分からんな。それとコウヘイよ。その零魔法にはもう一つ効果があるのじゃ」
「へ……？　ただでさえチートっぽいのにまだあるんですか？」
「うむ。というより、それだけでは伝説とは呼べんじゃろうが。物理系の魔法を使うやつには負けるんじゃしの」
「そ、それはそうかもしれませんが……」

基本的に何にでも弱点ってあるんじゃないのか……？
伝説の魔法っていってもこれ以上の効果って……？

「そしてそのもう一つの効果こそがコウヘイの魔法が零魔法と呼ばれる理由なのじゃよ」
「ええっ！？　今のが本命の効果じゃないんですか！？」
「当たり前じゃ。伝説の魔法はそんなに軟なものではない零魔法のもう一つの効果、それは……」
「そ、それは……？」（ゴクッ）

「魔法を創ることが出来る」
「ああ、何だ。魔法が創れる……ってええぇぇーーっ！？」
ま、魔法が創れる！？
何だよその最強設定は！？
「マ、マスター！　一体それはどういう意味だよ！？」
「そのままじゃ。コウヘイが思った通りの魔法が創りだせるのじゃ。ただ、直接的に敵を殺すような魔法は創り出せんがの」
「い、いや、創りだせなくても強すぎでしょ！　というか、クロレスさんは何でそんなことを知ってるんですか？」
「ワシの知り合いにもおったんじゃよ。その伝説の魔法を使える人物がの。強かった。ワシは一度も勝ったことがなくてのぉ……」
いやそりゃそうでしょ！
魔法を好きに創れるやつに勝てるわけないじゃん！？
「今どうしておるのかは知らんが、まさか生きている内に二人も伝説の魔法を使うに出会うとは……」
「ちょ、ちょっといいかコウヘイ。一度魔法を創ってみてくれないか……？」
「へ……？　あ、ああ！　そうだな。試してみるか」
「ふむ。ならばまたワシに向って魔法を放つがよい」
「ありがとうございます。では……」
どんな魔法を放とうか……？
雪……氷……水……火……
どれも強そうだしなぁ……
よしっ！そんじゃ闇の魔法でも使ってみるか！

「いきます！　闇の波動（ダークウェーブ）！」

俺の手からは俺の想像した通りの渦渦しい黒い闇がクロレスさんに放たれた。

クロレスさんは平然とそれを受け止めたが、満足そうな顔をしてこちらに戻ってくる。

「いい出来じゃ。やはり素晴らしい魔法じゃ。これが零魔法と呼ばれる理由なんじゃよ。無から魔法を創る。だから、零魔法じゃ」

「無から魔法を……」

凄え……

俺が使ったのに今だに信じられねぇ……

なんというか、凄い。

何で俺がこの魔法を使えるのかは分からないが、凄く感動する。

魔法ってこんなに面白いんだ……！

「さて、それではコウヘイよ。お主はこのギルドに入るかの？」

「え……？あ、そういえば……」

元々このギルドに入る目的で来てたんだよな。

魔法のことで一杯になってわすれてたぜ……

というか何だかもうこのギルドに入ってた気分だったし……

「はいっ！　このギルドに入らせていただきます！」

「うむ。嬉しい答えじゃ。ならば、契約を交わすぞい」

「契約？」

「そうじゃ。このギルドの一員である証の契約じゃ」

「はい。分かりました」
「では……。ゴホン。サミダレコウヘイ、汝は我がリバティドラゴンの一員となり、このギルドに反することなく、世の為に魔法を使用することを誓うか？」
「はい、誓います」

俺がそういった瞬間、俺の体が光に包まれ、手の平ぐ光った。
そして、一つの龍のタトゥーのようなものと下に見たことの無い文字。
しかしそこにはリバティドラゴンと書かれていることが分かった。
段々と俺を包んでいた光が消え、元に戻る。

「よし、これでコウヘイも今日からリバティドラゴンと一員じゃ！」
「ありがとうございます！」
「よかったなコウヘイ！」
「ああ！」

『凄いぞ！　伝説の魔法を使うやつがギルドに入るんだ！』
『また新しい仲間か！』
『よろしくな！』

リクトだけでなく、周りの人たちも皆、俺を歓迎してくれるかのように言葉を交わしてくれた。

「はい！　皆さん、よろしくお願いします！」

龍の尻尾《ドラゴンテイル》

俺がこの『自由の龍（リバティドラゴン）』に入って早二週間。
ギルドの決まりやルールを教えてもらい、だいぶギルドの人たちの名前も覚えて、同い年くらいの親しいやつも増えてきた今日この頃、俺はリクトと一緒にクロレスさんに呼ばれた。

「マスター、何の用だ？」
「おお、来たか二人とも。今日は二人に大事な話があってのぉ」
「大事な話？　一体なんでしょう？」
「ふむ、それは今から説明するのじゃが……おお、レオン達も来たようじゃ」
「おう、何の用だマスター？」
「何かあったんですか？」
「もしかしてまたお使い？」
「うわ～！　楽しみ楽しみ！」

やってきたのは男一人と女の子三人。
四人とも、最近仲良くなった同い年のやつらばっかりだ。
一人目はレオン・アルベルト。男。造雷魔法を使う魔導師で、どこか落ち着いた雰囲気を持っているやつだ。
二人目はリサ・クリスティーナ。自然魔法の使い手で、大人しく、和やかな雰囲気が特徴的。
三人目はウェンディー・マグレスタ。使獣魔法を使っており、いつもしっかりしている。
最後はメル・フレステント。流星魔法を使う、能天気なやつ。
確か、皆まだ本格的な仕事をやらせてもらえてないはずだが……何で集めたんだ……？

「うむ。皆も集まったようじゃし、要件を伝えようかの」
「で、その要件は？」
「お主らもだいぶ大きくなった。もうそろそろ、ギルドの一員として活動し始めてもいい頃合いじゃ。新しくコウヘイも入ったことじゃし、お主ら6人でチームを組んで活動し始めてはどうかの？」
「マ、マジかマスター！？　やっと依頼ができるのか！？」
「やっとか……！　やっとこの時が来たのか……っ！」

チーム……か。
このギルドで仕事をするときに、ほとんどの人たちがチームを組んで活動していることは知っていた。
その方が、もしもの時の為に都合がいいし、便利らしい。
まだギルドに入ったばかりの俺はチームのことなんて考えきれなかった。
それがこいつらとすることになるんだな……。
足引っ張らねえように頑張らねえと！

「それではチーム名を決めてからまたワシのところへ来るとよい」
「「「はい！」」」

全員で元気よく返事をすると、クロレスさんは満足そうにどこかへ行った。

「やったねリクト！」
「おう！　やっとこの時が来たぜ！」
「本当によかったですね」
「ああ。ずっと待ち望んでいたからな。コウヘイとも一緒に仕事できるみたいだし、よかったぜ」
「それは俺も助かった。たぶんレオンたちとじゃねえと他に頼める人が居ねえし……」

「はいはい。喜んでるのはいいけど、先にチーム名を決めましょうよ。さっさとマスターに届けでて仕事しましょ？」
「それもそうだね」
「んなもん分かってるよ！　チーム名は『チームリクト』だ！！」
「「「……」」」

俺たちは冷めた目でリクトを見る。
いくらなんでも『チームリクト』はねぇだろ……

「な、なんだよその目は……」
「『チームリクト』って何よ……」
「五歳児でもそんな幼稚な名前付けねえよ……」
「流石に酷いですね……」
「なんだかバカっぽいよ……？」
「俺もフォローは出来ねえ……」
「っ！？　だ、だったら他に何があるんだよ！」
「それを今から考えるんだろうが」
「そうよ。もっと考えて決めないと」
「ちぇ。俺は考えるのが苦手なのによ」
「だからバカって言われるんだよ」
「うるせえメル！」
「はいはい。リクトは黙って。何かいい名前ってないかな？」
「あー……一つだけ案が……」

俺はおずおずと手を挙げる。
パッとした思いつきだが、悪くはないと思う。

「何？　聞かせて？」
「『龍の尻尾（ドラゴンテイル）』ってのはどうだ？俺たち……特に俺なんかはまだまだ新人で下っ端だけど、これから頑張ってこのギルドの名に恥ぬよ

うについて行くって意味を込めて『ドラゴンテイル』。どうだ？」
「ドラゴンテイルか……俺は気に入ったな。いいんじゃねえのか？」
「そうね……私もいいネーミングだと思う！」
「確かに！　何だかその意味も好きです！」
「少なくともリクトのより数百倍はいいよ！」
「ま、まあ確かにいいかも……」
「それじゃ、私たちのチームの名前は『ドラゴンテイル』で決定ね！」
「よし、今日から俺たち『ドラゴンテイル』の活動開始だ！」
「「「おう！」」」

皆が家族

「ほう、『龍の尻尾（ドラゴンテイル）』と名付けたのか。いいではないか」
「へへっ！　そうだろ？」
「こらリクト！　リクトが考えたんじゃないでしょうが！」
「そうだぞ。コウヘイが考えたのにお前が威張ってどうするんだよ」
「ははっ！　それではドラゴンテイルの活動申請を受け取るとするかの。今日からはギルドの一員としての自覚をより一層持って仕事に励むがよい」
「「「はいっ！！」」」
「それとコウヘイ、気をつけるのじゃぞ？」
「へ……？　何をですか？」
「零魔法は人の生死に直接関わる魔法、そして、魔力の増減、操作する魔法は使えんことを忘れるでない。敵に隙を作ることになるからの」
「はい、分かってます」
「それと、いくら伝説の魔法じゃからといって無茶は禁物じゃ。魔法は使い方次第でいくらでも強くなれるもんじゃから、お主が敗れる可能性を十分にあるからの」
「ご忠告ありがとうございます」

過信は禁物ってことか。
まあ最初から過信なんてないが、気をつけておこう。
クロレスさんに軽くお辞儀をすると、早速依頼掲示板を見ているリクトたちの元へと向かった。

「どうだリクト？　何かいい仕事あったか？」
「いや、まだだ。ここは一発デカイ仕事を……って痛っ！？」
報酬額の高い仕事に目を通していたリクトの頭をウェンディーが叩く。

「何するんだウェンディー！？」
「何するんだじゃないでしょうが！　最初の仕事なのよ！？　ここは仕事を覚えるって意味で簡単な仕事を選びなさいよ！」
「それもそうですね。最初の仕事で躓くのは嫌ですしね」
「大丈夫だって。俺がいるんだし失敗なんてしないしない！　大船に乗った気持ちでいろよ！」
「リクトがいるから心配なんだけどね。泥舟にでも乗った気分だよ。でなけりゃタイタニック号」
「……っ！　うるせえメル！」

……いいなぁ…。

俺はリクトたちのやり取りを見てそう思った。
このギルドに入って、確かにリクトやレオン、メルたちとは仲良くなったものの、こんな風に冗談言って笑えるような関係にはなっていない（と思う）。
俺も早くこんな風に楽しく話してぇ……

「どうしたコウヘイ。さっきからボーッとリクト達を見てるが？」
「いや、ちょっとな。羨ましく思ってただけだ」
「羨ましいのか？」
「まあな。俺もあんな風にボケたりツッこんだりしたくてよ」
「ならすればいいじゃねえか」

「出来たら苦労なんてしねえよ。レオン達とだって、知り合ってまだ二週間も経ってないんだぜ？いくら仲良くなったからとは言っても、そう簡単にはいかねえよ」
「そうか？　こんな風にお前が俺にそのことを話してるくらいなんだし出来るだろ」
「へ？　あ、そういえばそうだな……。でも、レオンには何となく相談出来るってだけだよ」
「それは頼られてるってことでいいのか？」
「どうぞご自由に」
「そこ流すなよ……。ったく、そんなこと気にするなよ。『二週間も経ってない』だ？　関係ない。俺なんて、ギルドに入って三日でリクトと喧嘩したぜ？」
「早……。お前達って仲悪いのか？」
「いや。寧ろいい方だ。喧嘩するほど仲がいいって言うだろ？」
「とはいっても入って三日で喧嘩って……」
「だから関係ないって。このギルドは皆そんなことは気にしない。入ったその日から家族なんだよ」
「家族……？」
「リクトから聞いただろうが。ここはいろんな事情を持ったやつらが集まるって。だから新しいやつでもここにくれば一緒だ。一人新しい家族が増えたみたいなもんだからよ」
「だからってすぐ仲良くなれるもんか？」
「おう。当たり前だ。それに、俺達なんてチーム組んだ仲間だろ？　だったら尚更じゃねえか。ボケかましたらいい。ツッこんだらいい。誰一人として怒るやつも責めるやつもいねえよ」
「そうか……ありがとな。なんかスッキリした。俺、今日から少しずつあの輪に混じっていくわ」
「ああ、そうしろ」
こいつらが俺を迎え入れてくれたんだ。

だったら、少しずつでも入っていかねえとな。

……つかこっちの世界でもタイタニックって通じるんだ……。

「ねえコウヘイ、コウヘイはこっちとこれ、どっちの依頼がいいと思う？」

「ん？　どれどれ？」

俺も輪に溶け込めるはずだよな。きっと。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1404y/

最強の転生者って俺……？

2011年11月9日01時44分発行